政策・土木交通常任委員会資料 7
平成 27 年(2015 年) 6 月 10 日(水)
総合政策部文化振興課新生美術館整備室

新生美術館の設計・整備について

1 整備の方針

新生美術館基本計画（平成 25 年 12 月策定）（資料１ 基本計画の概要）に基づき、近代美術館（既存館）の改修と新館の建設、関連するびわこ文化公園（文化ゾーン）の改修を一体的に行う施設・機能整備を進める。

（1）想定延床面積（整備面積）

近代美術館（既存館）【改修】8,544 ㎡＋新館想定面積【新築】6,656 ㎡＝計 15,200 ㎡

（2）想定施設整備費用

美術館整備（改修・増築）約 47 億円　　公園整備（改修）約５億円

（3）主な施設整備内容

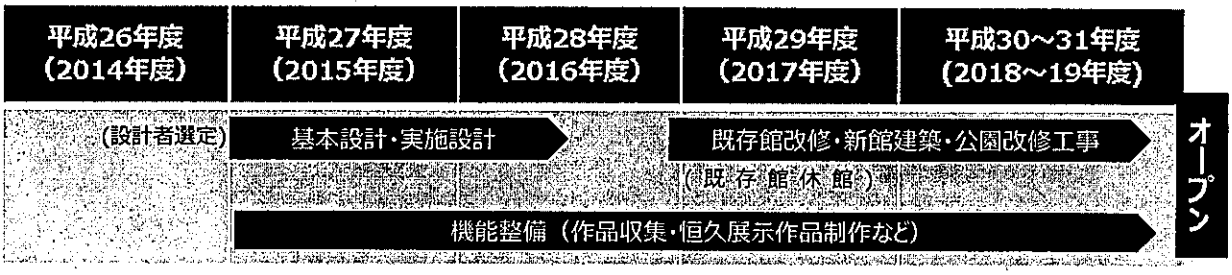
・新たに収集・展示の柱に加わる神と仏の美（琵琶湖文化館収蔵作品を移転）とアール・ブリュットに対応した展示室や収蔵庫の設置

・企画展示室、収蔵庫、ギャラリーの拡大

・レストラン、ショップ、創作室、キッズ・ルーム、情報・交流室等の新設・充実

・駐車場拡大、公園全体の回遊性向上、県立図書館との流動性確保　　など

（4）想定整備スケジュール



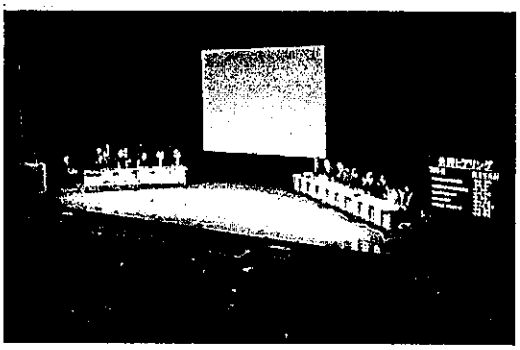
2 基本設計・実施設計（設計者選定と今後の進め方）

設計者を選定するため平成 26 年 11 月に公募型プロポーザルを公告し、全国から応募のあった 13 社について選定委員会で審査を行った結果、金沢 21 世紀美術館やフランスのルーブル・ランスなど、国内外で多数の実績を有し、高い評価を得ている有限会社ＳＡＮＡＡ（サナア）事務所を、平成 27 年 3 月に選定し、契約を締結した。（資料２ ＳＡＮＡＡ事務所の技術提案書）

平成 27 年度は、設計者による県民を対象としたワークショップなどを実施し、11 月に基本設計を完了する予定。あわせて、フォーラムの開催やリーフレットの作成などを行い、建築イメージを広く県民に発信していく。

○設計委託料　179,945,280 円（うち平成 27 年度 54,000,000 円）

各社の提案書を近代美術館ロビーとホームページ上で公開し、
県民アンケートを実施（回答者 300 人）



公開プレゼンテーション
（H27.2.27 ピアザホール・傍聴者 400 人）

3　作品収集・制作

美術館のオープンに向け、新たな柱となる仏教美術・神道美術の収蔵のほか、これまでの近代・現代美術や郷土ゆかりの美術に加えアール・ブリュットも含めた新たな作品の収集、美術館や公園のシンボルとなるコミッションワーク（恒久展示作品）の作者選定のための調査・検討等を行う。

＜「アール・ブリュット作品収集の考え方」（平成27年3月策定）より＞

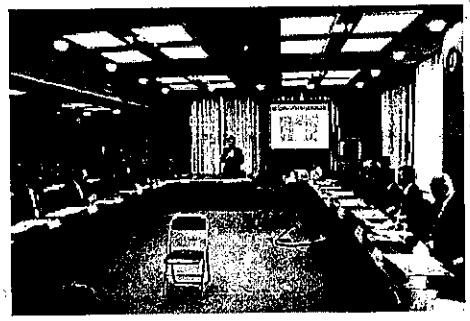
- アール・ブリュット作品の収集審査等を行うため、美術館協議会にアール・ブリュット専門家が加わったコレクション形成部会を新設し、収集作品の芸術性を担保する。
- 購入に当たっては、美術館側から購入希望額を提示できるよう、美術館で過去の作品取引事例を収集し、作家の過去の展覧会出展経験等を踏まえ、専門家のアドバイスを得ながら、購入価格の目安（基準額）を作成するものとする。
- 美術館学芸部門が調査する過程において、専門家（目利き）等のアドバイスやサポートを受けられるよう、必要な体制を整備する。

4　「みんなで創る美術館プロジェクト」の展開

新たな美術館が県民や地域とつながりながら美の魅力を発信し、滋賀を元気にするとともに、県民の皆さんに愛着を感じていただける存在となるよう、整備状況の公開や連携の促進、「美の滋賀」の魅力の発信、美術館と県内各地を結ぶ取組など、「みんなで創る美術館プロジェクト」を展開し、県民や幅広い団体等との協力や参画を図る。

○主な取組

- 「新生美術館連携推進懇話会」の開催
  各界との連携のもと整備を進めるために設置。経済・文化・教育・福祉・市町等の関係団体の長等で構成（座長：知事）
- 各分野で活躍する団体で構成する「プロジェクト推進会議」の開催
- 近代美術館で新たな美術館の方向性に沿った企画展（志村ふくみ展・アール・ブリュット展）を開催
- 「美の糸口―アートにどぼん！－」の開催
  子どもをはじめ多くの県民が美の滋賀の魅力を五感で楽しめるワークショップ・フェスティバル（会場：近代美術館および周囲の公園内）
- アート・ツアーバスのモデル運行
  近代美術館と地域を結び、県内各地の美を体感できる施設やスポットを巡るバスツアー
- 美術館と県内各地域との結びつきを深める「お出かけミュージアム・キャラバン」や、学校でのワークショップ等を開催



新生美術館連携推進懇話会
（H27.3.24第1回開催）

美の糸口-アートにどぼん！-
（H26.8.13第1回開催　来場者数1,700人）

お出かけミュージアム・キャラバン
（出張展示と学芸員によるトーク）

新生美術館基本計画（平成25年12月策定）の概要

資料1

計画策定の背景

○滋賀県には、美しい自然に恵まれた穏やかな環境の中で、自然と共生する文化が生まれ、棚田、街並み、建築、伝統工芸など滋賀ならではの日常の美が育まれてきました。

○最近では、県民・作家の創作活動をはじめ、地域の団体による地域の魅力とアートを結び発信するイベントなどが各地で展開されています。

神と仏の美(仏教美術等)

○国宝・重要文化財の指定件数全国第４位

○地域の暮らしや、風土、信仰と深く結びつきながら大切に守られている

○優れた仏教美術等とそれを生み出してきた風土・歴史文化が十分知られていない

○傷みの激しい文化財の増加や地域での保存管理が困難なケースが増加

○文化財の保存・発信拠点であった琵琶湖文化館を平成20年度以降休館しており、その機能継承が不可欠

滋賀県立近代美術館

○昭和59年に開館以来、様々な展覧会や事業を開催。これまで約380万人が利用

○小倉遊亀、野口謙蔵、清水卯一、志村ふくみなど、近代日本画や郷土ゆかりの美術、現代美術を柱に、優れた作品を約1,500点収蔵

○展覧会観覧者数が長期的に見て減少傾向

○設備の老朽化、展示・収蔵・県民利用スペース等が不十分

○アクセスの向上が求められる（バス停からの距離、駐車場収容台数不足等）

アール・ブリュット

○県内では戦後まもなくから障害者福祉施設等において、自由な造形活動が先駆的に行われている

○近年ではそれらの作品がアール・ブリュットとして、芸術性の観点からも、国内外からの評価や関心が高まっている

○作品の発見や魅力の発信の継続的な取り組みが求められる

○作品の流出や散逸を防ぎ、県民の財産として保管する機能がない

「美の滋賀」づくりの推進

滋賀の様々な美を交差しながら伝えていく場所や、美を通して誰もが関わりつながれる新しい「座」を形成することをめざして、平成24年度から以下の3点を柱に「美の滋賀」づくりの取り組みを進めています。

①県民や関係者とともに「美の滋賀」の土壌をつくり、活動を活発化させる

②新生美術館をつくり、地域や現場と交流しながら受発信する

③滋賀の「美」の魅力を県民自らが伝える舞台をつくる

新生美術館の整備

滋賀県ならではの県民性や風土の結晶としての３つの美を柱に、県内各地にある滋賀の美の魅力のエッセンスを凝縮して伝える入り口や、創作活動の現場や暮らしの場とつながり、交流しながら受発信を行うセンターとしての役割を果たすことを目的に、県立近代美術館の機能を拡張し、新生美術館として再整備します。

※「新生美術館」は近代美術館が新たな美術館として再スタートすることを示すために使用している一般的呼称です。正式な名称は、新たな美術館の使命や機能を踏まえて、今後決定します。

新　生　美　術　館

新生美術館の使命

1.「美の滋賀」の拠点となる

○「美の滋賀」の入り口として、過去から現在までの多様な美の魅力を発信し、多くの人を県内各地に誘います。

○県民が滋賀に対する愛着や誇りを育む機会を提供するとともに、貴重な滋賀の美の資源を確実に次世代に引き継ぎます。

○美を通じて多くの人がつながる機会を提供し、新たな交流と創造を生み出します。

2.人の育ちと共生社会の実現に貢献する

○県民や利用者、特に次代を担う子どもたちの知的好奇心と感性を育む機会を提供します。

○様々な表現や価値観との出会いから、お互いの多様性を認め合い尊重する、共生社会の実現に貢献します。

3.まちづくりや観光、産業などと連携して活力ある地域社会を実現する

○美の資源が持つ可能性を最大限に活かして、まちづくりや観光、産業、福祉など幅広い分野の波及効果を生み出し、創造的で活力ある地域社会を実現します。

新たな魅力

収蔵・展示の分野拡大

近代日本画 / 現代美術 / 郷土ゆかりの美術 ＋ 【新たに収蔵・展示】神と仏の美 / アール・ブリュット、若手等

企画展示の充実

幅広い芸術表現に対応した新たな展示室を設け、国内外の様々な美の潮流を紹介

県民ギャラリー拡大

創作・交流・アメニティ機能の充実

レストラン・カフェ、ショップの充実、キッズ・ルーム、創作室、情報・交流室の新設

自然の美も楽しめる 公園整備による屋外での作品展示・イベント、琵琶湖・比叡山眺望

県域に展開 地域との連携による出張展示、イベント開催、研究、支援等の活動

新生美術館がめざす姿

創造との出会いの場

滋賀ならではの美をはじめ、世界の創作や美を巡る動きを幅広い視野で受け止め、魅力的なかたちで提供する、新たな創造との出会いの場になります。

多くの緑を結ぶにぎやかな広場

「美の滋賀」の広場として、美をきっかけに多くの人や地域がつながり、美術館の運営にも様々な人や団体が関わる、いつも人が集う場になります。

頼られる存在

滋賀で生まれ育まれてきた美の資産を未来に確実に引き継ぐげるよう、専門的な知識と幅広い経験に基づいた活動や情報を広く提供する、信頼される存在であり続けます。

新生美術館の機能

美の魅力を提供する（展示・普及機能）

○過去から現在までの滋賀の美の魅力を紹介

○神と仏の美、近代・現代美術、郷土ゆかりの美術、アール・ブリュットのそれぞれの魅力を引き出す空間での収蔵品展示

○国内外の様々な美や、最先端の美、建築、工芸、デザイン、ファッション、メディアアート、サブカルチャーなど様々な美の潮流を取り上げる

○美術館のシンボルとなる恒久展示作品を設置

○多くの人が展示を楽しめる案内表示や鑑賞ツール

○五感で感じる展示やワークショップ、体験型イベント、創作への参加

○屋外空間を活用した作品展示やイベント開催

明日の人を育む（学習機能）

○学校や団体等の鑑賞プログラムなど、子どもたちの育ちの中に、創造性や感性を養う教育プログラムを提供

○キッズ・ルームや親子向け展示など、子どもや家族連れが気軽に美を体験し、楽しめる機会を提供

○対話型鑑賞や講座の実施など、創造的な鑑賞者を創出

つなぐ・広げる（情報・交流・連携・アメニティ機能）

○滋賀の美に関する資料や情報の提供。特に神と仏の美とアール・ブリュットについては、情報発信や学び、交流の場となるなど拠点的機能を果たす

○県内の美術館・博物館や観光スポットとの連携による事業展開や周遊観光の提案

○美術館・博物館、文化施設、市町、社寺、大学など関係する施設や拠点との連携のネットワークづくり

○地域と連携しながらの出張展示やイベント、アート・プロジェクトの実施、インターネットでの活用など美術館の機能を県内各地で展開

○県産の食材や特産品を扱うレストラン・カフェやショップの設置

集める・守る（作品収集・保管機能）

○近代美術館が収集してきた近代・現代美術などの作品を今後も収集・保管の柱とする

○琵琶湖文化館に収蔵されている仏教美術等の文化財を移転し、適切な環境で保管するとともに、今後の新たな寄託や寄贈の受入れに対応

○滋賀で新たに見出される美を支えるため、県内を中心に日本やアジアの優れたアール・ブリュット作品や、将来が期待される若手をはじめ県内作家の作品を収集・保管

探究する（調査・研究機能）

○滋賀の美に関する情報収集と研究に取り組み、その成果を還元

○神と仏の美の拠点として、独自の調査研究や県内外の博物館等との共同研究を実施

○アール・ブリュットの拠点として、日本やアジアの幅広い資料や情報の収集、作品情報のアーカイブ化を行うとともに、作品の芸術性を評価できる人材の育成等に貢献

運　営

<基本的な方針>

①美術館ならではの高い満足感を提供するため、県民や利用者の立場に立った運営を行います。

②創造的で革新的な活動を展開するため、地域や社会とつながり双方向で連携をすすめます。

③持続的な美術館活動を展開するため、常に経営感覚を持ち効果的・効率的な運営を行います。

<ポイント>

○新たな運営組織として、学芸部門、企画・事業部門、広報・マーケティング部門、総務部門の設置を想定

○必要な専門性を備えた学芸員を確保

○県内の文化施設や地域の文化関係団体、社寺、作家などと積極的・有機的に関わりを持つ

○幅広い利用につながる戦略的な広報活動の展開

○ボランティア活動の充実

○レストラン・カフェ、ショップなど無料エリアの魅力を向上

○地元市（大津市・草津市）や地域団体、商業施設、公共交通機関、大学等近隣地域・施設との連携

施設整備

<基本的な方針>

①周囲の自然環境との調和の中で、多くの県民や利用者が憧れを感じることができる、デザイン性を備えた空間を実現します。

②自然の美も含めた、「美の滋賀」の拠点であることの象徴として、琵琶湖や比叡山の景観が望めるスペースを設置します。

③多くの人が集える広場のような存在となるよう、子どもや高齢者、障害のある人をはじめ、すべての人にとって居心地がよく、使いやすい施設を実現します。

④びわこ文化公園全体を美術館とみなし、公園の改修・機能向上と美術館施設の整備を一体的に実施します。

⑤新生美術館として必要な機能を今後長期的に果たすことができる機能と面積を確保するために、現在の施設（既存館）の改修と、新たな施設（新館）の増設を行います。

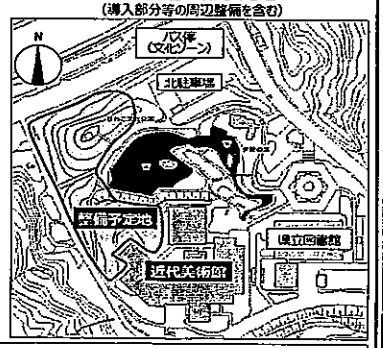
<ポイント>

○新たな空間や設備を備えた新館の増設→既存館の隣接地西北側に建設、両館に出入口、北側の道路から認知できる工夫

○公園空間との一体整備→屋外での作品展示、バリアフリー化、高揚感演出

○アクセス利便性改善→駐車場収容台数増加、バス路線・停留所改善、地域や公共交通機関との連携による瀬田駅等アクセスルートの表示改善・演出

新館関連整備予定地
（導入部分等の周辺整備を含む）



○新生美術館として必要な諸室の想定　延床面積合計15,200㎡（既存館8,544㎡＋新館整備想定面積6,656㎡ ）

・展示部門	約3,800㎡	収蔵品展示室、企画展示室、県民ギャラリー等拡大、恒久展示作品設置
・情報・交流・アメニティ部門	約1,500㎡	情報・交流室、創作室、レストラン・カフェ、ショップ、キッズ・ルーム等新設、琵琶湖・比叡山眺望
・収蔵部門	約3,400㎡	収蔵庫拡大（作品の材質等に応じて複数設置）、搬入口等
・調査・研究部門	約 500㎡	資料室、修復室等
・管理・共用部門	約6,000㎡	

目標・費用等

<来館者目標>

年間300,000人
（現在の近代美術館来館者（年平均）131,000人＋新生美術館として利用者増につながる取組による169,000人）

<想定整備費用>

美術館整備　約47億円
公園整備　　約５億円

<想定スケジュール>

設計等着手
平成27(2015)年3月

全面オープン
平成30(2018)～31(2019)年度

滋賀県立近代美術館建設プロジェクト　文化と環境を重視する美術館建設

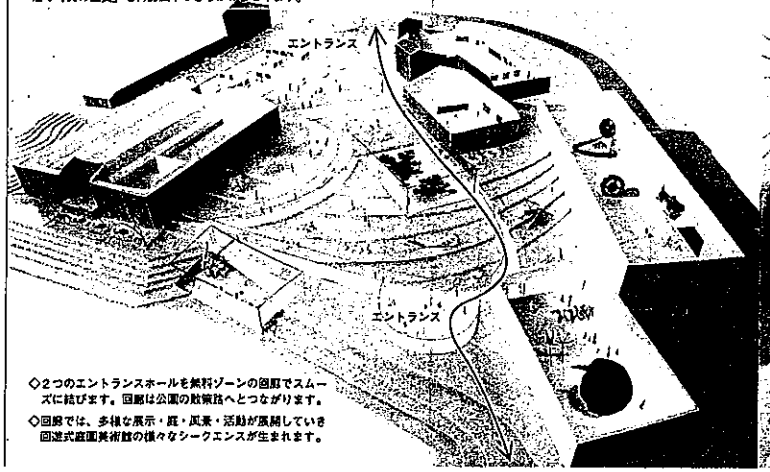
□ 回遊式庭園美術館

ランドスケープにまかせるびわこ文化公園と調和する回遊式庭園美術館です。
回遊式庭園美術館は、美術館部と公園部が一体にその回遊体験を広げます。
緩やかな起伏に富むゆるやかな地形にそった空間構成を計画し、公園動線と美術館動線が調和し連続する庭園美術館をつくります。

夕照の庭の池を囲み、公園の地形と調和する庭園美術館は、びわこ文化公園の新しい風景をつくります。

□『美の滋賀』

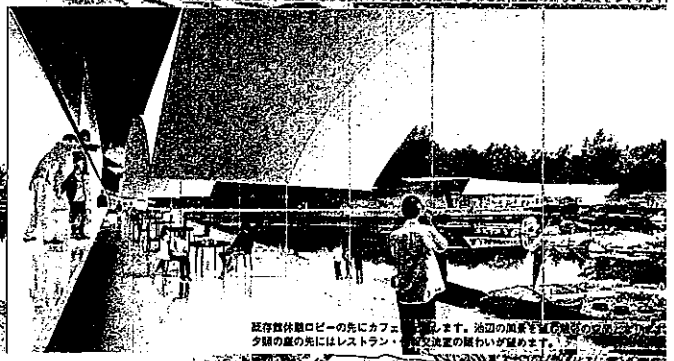
新しい美術館、既存の美術館、夕照の庭の池、県立図書館がつながり、新しいびわこ文化公園の体験をつくり出します。公園動線から見える美術館と芸術鑑賞から見える滋賀の風景が連続し、「美の滋賀」の拠点となる新生美術館ならではの体験として現れます。
この体験はびわこ文化公園周辺、さらには琵琶湖・近江八景といった滋賀の風景へ、そして日常の体験と繋がっていき、来館者が日々の生活で「美の滋賀」を再認識するきっかけとなります。



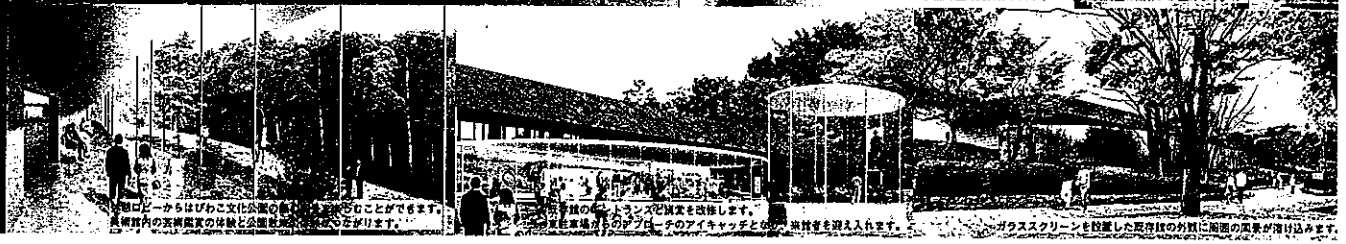
◇2つのエントランスホールを無料ゾーンの回廊でスムーズに結びます。回廊は公園の動線へとつながります。

◇回廊では、多様な展示・庭・風景・活動が展開していき回遊式庭園美術館の様々なシークエンスが生まれます。

美術館をめぐる回廊にはびわこ文化公園の風景や多様な中庭の展示風景が広がります。



既存館休館ロビーの先にカフェ[illegible]ます。池辺の風景を[illegible]
夕照の庭の先にはレストラン・[illegible]交流室の賑わいが望めます。



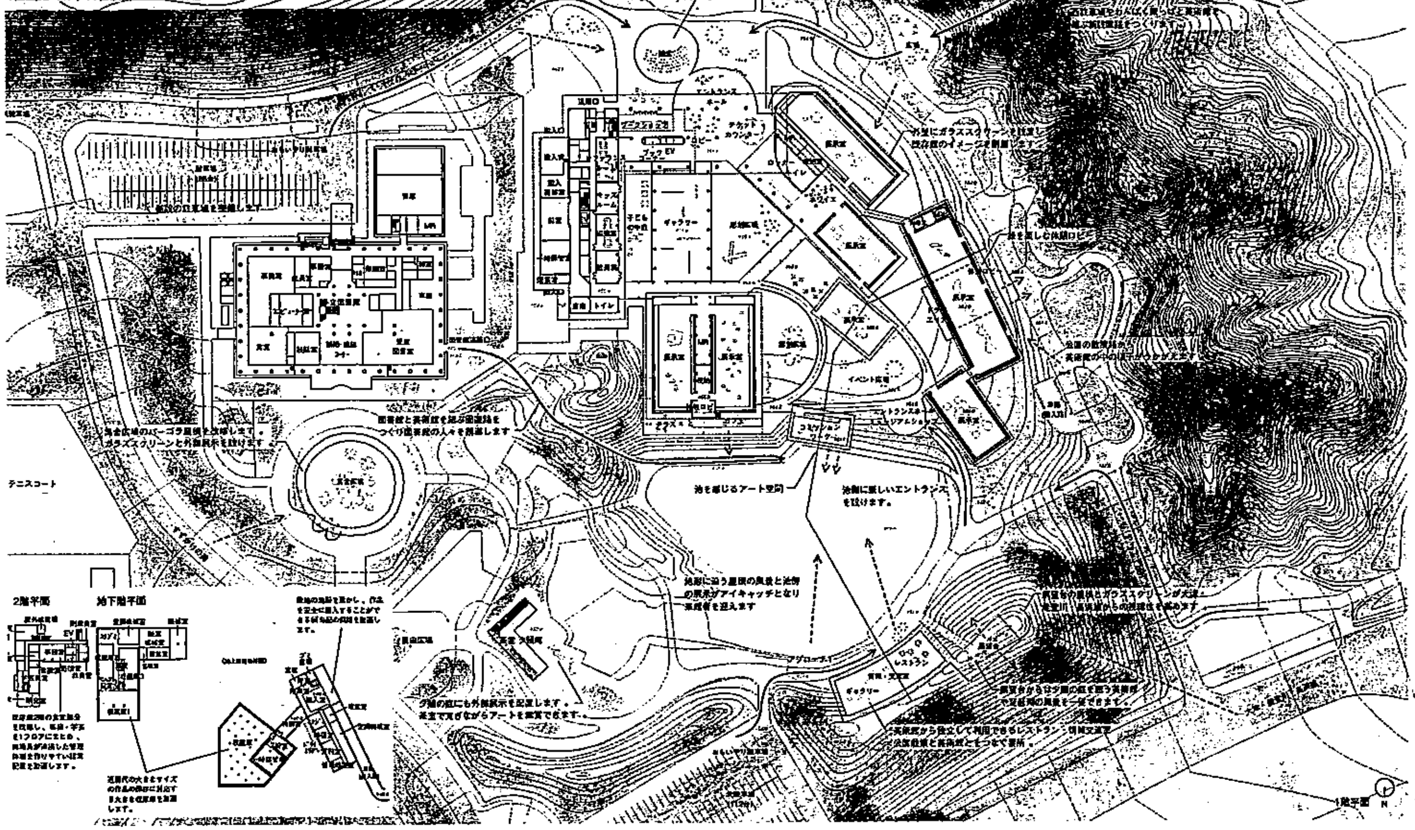
[illegible]館ロビーからはびわこ文化公園の[illegible]ることができます。
美術館内の芸術風景の体験と公園散[illegible]がります。

[illegible]館の[illegible]トランスを改修します。
[illegible]文化会館からのアプローチのアイキャッチとなる[illegible]来館者を迎え入れます。

[illegible]グラススクリーンを設置した既存館の外観に周囲の風景が溶け込みます。

□ びわこ文化公園の地形と調和する美術館

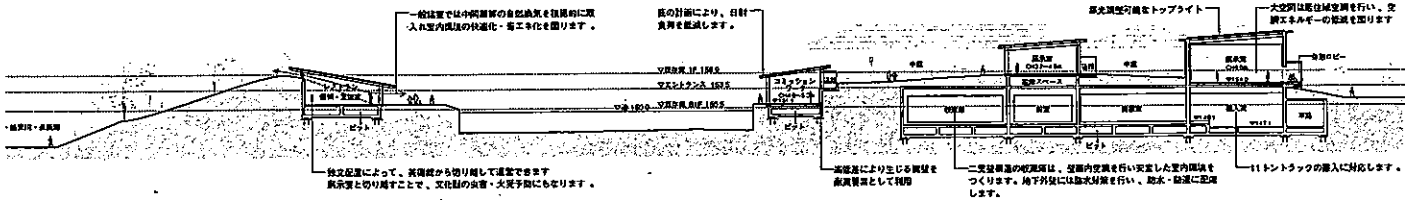
新生美術館を含み、びわこ文化公園全体がひとつのやわらかな輪になり、様々な「見る・見られる」の関係がつくられます。びわこ文化公園全体とスムーズにひとつにつながれるために、〔 〕あいだにレストラン・情報交流室を配置し、新生美術館のアプローチを発展します。全体の回遊路には、外部展示や小さな休憩スペースが点在します。

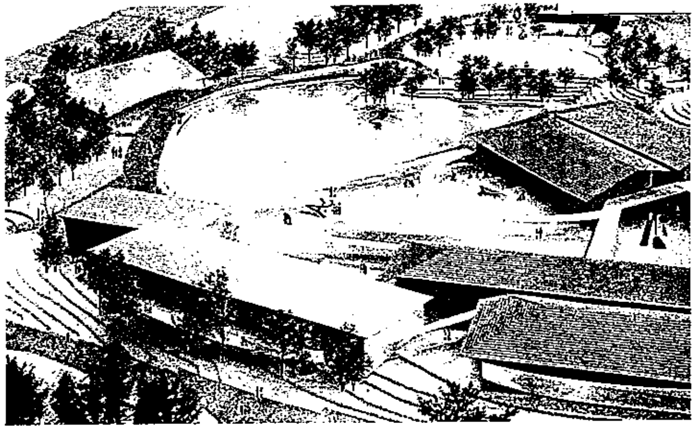


〔 〕から既存館までの緩やかな勾配の地形に調和する美術館を計画します。北駐車場からアプローチする新しいエントランスホールから〔 〕の回遊路が始まり、ゆるやかなスロープで既存館へと繋がります。地形に沿った回遊路は公園散策の体験の一部となり、さらに他の〔 〕へと繋がっていきます。

□ 安全性に配慮した保存・展示環境の整備

免震で文化財の安全性に配慮した保存・展示環境を計画します。地震の影響を受けにくく、通年で安定した温湿度環境となる地階に収蔵庫を配置します。室周囲からの熱負荷が一定となるため、均質な室内環境を作り出すことが出来ます。





□ ひとつにつながるびわこ文化公園

里山の自然を保全しながら、公園全体を散策する回遊路を計画します。この回遊路の一部に新生美術館が配置され、公園散策の体験と連続した芸術鑑賞体験をつくりだします。また、公園内にも外部展示を配置します。
公園内の各駐車場を再整備し、収容台を増大させ、県民がよりアクセスしやすいびわこ文化公園を目指します

風景がやわらかく映りこむガラススクリーンをたて、既存館の外観の一部を変え、イメージアップします。増築館の休憩ロビーや公園の一部にもガラススクリーンが配置され、新旧の美術館や公園全体がつながります。

□ みんなでつくる美術館

設計段階では美術館利用者・公園利用者とのワークショップや、他の美術館関係者や文化庁などの専門家からのヒアリングを行い、利用しやすく安全な美術館の計画を目指します。
課や学芸員と連携し、多様な意見に対応する柔軟な設計チーム体制をつくります。

□ 交流がうまれる美術館

公園散策のなかで美術館内の活動やアートに触れることができ、公園を散策する人々も自然に美術館に立ち寄れます。

また、美術館本館から独立して、レストラン・情報交流室・ギャラリーを水辺に配置します。公園利用者が気軽に訪れることができ、美術館情報だけでなく、他施設の情報や県民の活動などのインフォメーションに触れることができます。公園の風景を望むレストランと一体化し、県民の憩いの場となります

レストランと情報交流室

□ 省エネ化と環境負荷の低減

美術収蔵施設として持つべき信頼性と安全性の確保を基本に、公共施設としての運営に対応し省エネ化を図る効率的なシステム構築します。環境負荷の低減や環境問題にも配慮した総合的な設備計画を行います。

主な省エネ化対策
◇外壁・屋根の高断熱化を図り、躯体からの外皮負荷を軽減し、空調負荷の低減に努めます。
◇クール（ヒート）チューブを用いて建物への外気取入れを行い、地中熱を利用して冷暖房負荷の低減を図ります。
◇各諸室の運用形態を十分理解し、時間外運用や冷暖房同時要求などに柔軟に対応できる空調および制御システムを構築します。

□ 誰にでも使いやすい美術館

来館者スペースを1フロアに集約することで館内のバリアフリーに配慮した、すべての人に使いやすい美術館を目指します。

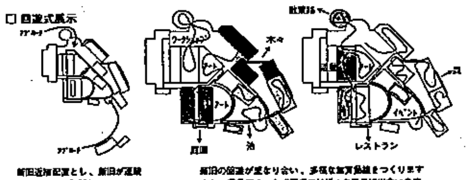
美術館全体を巡る回遊路の色々なところで休憩することができます。また、エントランス・事務室に近接してキッズルームを配置します。

案内表示や鑑賞ツールの利用など、障害のある方にも安心して利用できる設備を検討します。

□ 地形を活かした合理的な構造計画

高低差のある敷地への配置や平面形状、機能上の要求によって生じる条件などを最大限活かし、高い合理性を備えた構造システムとしています。地下の配置については既存館位置を考慮して、施工性に配慮した計画とするとともに、1階床梁をフラットスラブ形式として、経済性にも配慮した計画としています。多くの利用者や収蔵作品に対して高い安全性と経済性を兼ね備えた美術館の構造計画を提案しています。

□ 回遊式展示



新旧近接配置とし、新旧が連続する美術館を計画します。

新旧の回遊が重なり合い、多様な鑑賞動線をつくります
また、展示室をつなぐ回廊では様々な風景に出会います。

新旧の美術館を近接した配置関係とし、互いに連携して利用できる美術館を計画します。既存の回遊動線を拡張し、新しい美術館の回遊を付加することにより、より多様な鑑賞動線を生み出します。また、この回遊動線により、展示室の組み合わせを選択することができ、各回廊から見える風景や中庭の外部展示などと併せて多様な企画を展開することが可能になります。

□ 施工計画・コスト計画

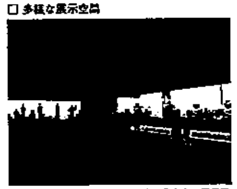
既存館の展示室や収蔵庫といった主な諸室を配置変更・用途変更しない計画とすることで、経済性・増築工事中の既存館の運営・収蔵作品の安全性に配慮した施工計画を実現します。

展示ガラスケースについても既存をそのまま活用できる計画としており、コスト削減に配慮した計画としています。

概算工事費

増築部分 建設工事費	約33.0億円
既存部分 内装修繕費	約7.4億円
既存部分 設備更新費	約5.9億円
敷地内造成工事	約0.7億円
総工事費	約47.0億円(税込

□ 多様な展示空間


光の入らない展示室
(滋賀の仏教美術の展示など)

びわこ文化公園の風景に包まれる展示室
(アール・ブリュット、コミッションワークなど)

ルーバー+ガラス天井

採光調整可能な展示
(近現代美術コレクション、新しい企画な

既存美術館の展示空間の特徴を活かしつつ、新たに高天井の展示室や、自然光を取り入れた展示室、周辺の風景に囲まれる展示室など様々な種類の展示空間を作ることによって多様な展示の体験を生み出します。増築館の大きな展示室は可動間仕切壁によって分割することができ、多様な企画の内容にフレキシブルに対応します。